

## 〔解説〕 三島由紀夫『仮面の告白』『豊饒の海』

有元 伸子

### I 『仮面の告白』（クイアな作家・三島由紀夫の誕生）

#### 自分の誕生の記憶を語る冒頭場面

「永いあいだ、私は自分が生れたときの光景を見たことがあると言いつづけていた。」——『仮面の告白』は、自分の誕生の記憶があるという「私」の回想によって始まる。夜間に生れたにもかかわらず、産湯を使わされた盥のふちにはたしかに日光が射していたのだと、背理に満ちた記憶を「私」は語るのだ。

幼少年時代を描く前半の二章では、主人公「私」は女性に肉体的欲求を感じられず、男性に性的欲求が向く「倒錯者」であると知覚し、「正常」にふるまうための演技を覚えていく。青年時代を描く後半の二章では、「私」は友人・草野の妹の園子に精神的に惹かれながらも、性的欲求がもてないために彼女との結婚から逃げてしまう。戦後に他の男と結婚した園子と再会してデートを重ねるが、どうしても男性の肉体に目が向いてしまう自分の欲望を知覚させられたところで、作品は閉じられる。

このように要約すると、幼時から「倒錯者」であることを自覚させられた「私」が、その結果として、女性との「正常」な異性愛関係から疎外されてしまう顛末が描かれた小説のように思えるだろう。ところが『仮面の告白』は、そんなに単純な小説ではない。

#### 自分で自分の生体解剖をする試み

三島は編集者への手紙のなかで「今度の小説、生れてはじめての私小説で、もちろん文壇的私小説ではなく、今まで仮想の人物に対して鋭い心理分析の刃を自分に向けて、自分で自分の生体解剖をしようという試み」だと自解している。「私小説」の言葉通り、『仮面の告白』に描かれる出来事の数々は、入隊検査で軍医が誤診して即日帰郷となったことなど、ほぼ作者・三島由紀夫の伝記的な事実と重なる。

にもかかわらず、なぜ「文壇的私小説」ではないのだろうか。『仮面の告白』の前半の重要人物は年長の不良少年・近江だが、「私」は近江に対しては、遊びの途中での偶然の掌のふれあいの他は、その逞しい体や豊かな腋毛を彼のようにでありたいと熱烈に眺めるばかりだった。視線はつねに「私」からの一方向であり、男性への性的な欲望がこの小説のなかで充たされることは決してない。初めての「私」の射精の対象が、体に矢が射さり殉教する美しい青年・聖セバスチヤンの絵画であったことは象徴的だ。

#### 婚約者の女性の結婚から出発した小説

これに対して作品後半に登場する園子は、駅のプラットホームを「私」の方へ向かってくる美しい場面に象徴されるように、「私の存在の根柢が押しゆるがされる」ほどに強く「私」に迫ってくる。園

子のモデルは、三島の学習院時代の友人の妹である。三島は、後年のエッセイ『終末観からの出発』で、この「戦争中交際していた一女性」の結婚によつて敗戦後の数年間は「荒涼たる空白感」に陥り、「何とかして、自分、及び、自分の人生をまるごと肯定してしまわなければならぬ」との思いが「以後の文学的情熱を推進する力になった」と述べた。

ともすれば同性への欲望が扱われる前半部分の方が注目されがち  
な小説であるが、執筆の動機としては、初めに「倒錯」があったのではなく、初めに「許婚者の婚約」があったのだ。『仮面の告白』第四章で、戦後再会した園子は、「私」に向かって「どうして私たち結婚できなかったのかしら」と問いかける。さらに作品の結末近くでは、身体的接触がないまま逢瀬を重ねることをいぶかしみ、「私」に対して性体験の有無を尋ねる。見栄をはる「私」に、彼女は無邪気にも相手の名前を尋ねて、「私」の心はついに力尽きてしまう。

つまり『仮面の告白』は、「どうして私たち結婚できなかったのかしら」という彼女の疑問に答えるために冒頭に立ち戻り、自分の半生をたどる形で構成された。作品前半の数々の挿話は、許婚者と結婚できなかった理由の答えとなるように記憶が再配置されている。幼少期の同性への性の目覚めが青年期の異性との恋愛の失敗へとつながるに連続していくのではなく、逆に青年期の破局から出発して、その要因として幼少期の記憶が発掘され、編成されて記述される――いわば原因と結果が転倒した小説なのである。

### 自分はなぜ「倒錯者」になつてしまったのか？

「私」は、「先天的な倒錯者」であることを自分の「宿命」として受け入れながらも、一方で後天的な成育環境にも原因があるのではないかと考える。幼児期の「私」が両親の手から離され家中で強大な権力をもつ祖母に育てられた第一章の挿話からは、自分の「倒錯」の原因を女性的に育てられた生育環境に求めようとしていたことがわかる。三島はフロイド理論を知り尽くしていたので、むしろ第一章はエディプス・コンプレックス理論を使って書かれたのではないかとすら指摘されている。

「私」は幼年期の記憶を、同性愛・異性装・サディズム／マゾヒズムの三種類に分類して記している。これらは、現在ではそれぞれ異なった欲望だと認められているが、当時は大正期以来の精神医学（性欲学）によつて、「正常」とは区別された「変態性欲」として一括りにされていた。『仮面の告白』には同性愛を擁護したドイツの性学者・ヒルシュフェルトの名も挙げられるが、当時最新の性科学を使いながら、自分が同性愛者であることを検証するために、あるいは同性愛者になつた要因を追跡するために記述されているのだ。

ところで最近、三島が十九歳で書いた生前未発表の習作「扮装狂」が発見されて、『仮面の告白』の原型であることが明らかになった。『仮面の告白』第一章の奇術師・松旭斎天勝を真似た扮装や第二章の近江の原型などが「扮装狂」にも出てくるのだが、「扮装狂」では同性愛には全く触れられることなく、扮装する歌舞伎俳優への憧れによつて閉じられる。『仮面の告白』は、少年時代に書いた自作のモチーフを再利用しながら、自分が「倒錯者」だと見えるようにプロットを変更していくのである。では、それはなぜなのだろうか。

### 戦後の文壇に再登場するための野心作

『仮面の告白』発表の前年に、三島由紀夫は創作に専念するために大蔵省を退職した。戦争中の三島は日本浪漫派の周辺で古典的な創作を発表して天才少年ともてはやされていたが、戦後は価値観が一転、二十歳で早くも、時代おくれになってしまった自分を発見する『私の遍歴時代』。文学的資質を再び開花させるために、「何とかして、自分、及び、自分の人生を、まるごと肯定してしまわなければならない」ともがき、安定した官僚の職を捨ててまで取り組んだのが『仮面の告白』であった。

『仮面の告白』こそは、三島由紀夫が戦後の文壇に再登場するために、「同性愛や血や死への希求といったセクシュアリティと、女性への精神的恋愛感情、男らしさへの憧憬と疎外といったジェンダーをモチーフとして、従来の私小説の手法を逆手に取る形で作り上げた野心作なのである。冒頭のありえない誕生の記憶の語りは、その宣言なのだ。

花田清輝は、三島にとつての仮面は、「おのれの顔をかくすため」ではなく、「逆におのれの顔をあきらかにするため」の「仮説」として存在すると述べた（『聖セバスチャンの顔』）。同性愛に対しては、医学的治療の対象から外れた現在でもなお、差別が全くないとは残念ながら言いがたい。まして当時は「変態」「倒錯」だと強く差別視されていた。それを仮面としてかぶり、戦後の文壇にセンサーショナルに再登場するための武器にしたのである。ここに原因と結果とは再び転倒し、破局の原因としてたどりついたはずの同性愛自体を書くことが目的化し、異性愛の失敗はその証拠として示されることになる。

### あなた自身の性を問いかけてくる小説

だからといって、鋭い「心理分析の刃」によって「自分で自分の生体解剖」をして描かれた「私」のナイーブな心のおのきの印象が消えるわけではない。自身への繊細で沈着な心理分析と、文壇に打つて出るために野心的に構築された仮面と。その両方が『仮面の告白』にはある。「肉にまで喰い入った仮面、肉づきの仮面だけが告白」をすることができる（『仮面の告白』ノート）という自解は、そうした複雑なありようを示しているよう。

「クイア」という用語クイムがある。もともとは「変態」「おかま」という意味の蔑称であったが、当事者たちが自ら名乗ることにより、同性愛や異性装などを「倒錯」だと見なして異性愛だけを当然視する社会の仕組そのもの（ヘテロノーマティヴィティ）を問い直すことが可能になった。不安や疎外感にかられ、「正常」に見えるように演技する欺瞞をあばく「私」の自分自身への「生体解剖」の記述を読むことは、同性愛か異性愛かを問わず、私たち読者に自分のセクシュアリティやジェンダーのありようを直視せよと迫ってくるように思える。『仮面の告白』こそは、クイアな作家・三島由紀夫の誕生を告げる作品なのである。

## II 『豊饒の海』——「世界解釈の小説」と静謐な結末——

### 自決当日に渡された最終回原稿

『豊饒の海』は三島由紀夫の遺作である。最終回原稿は、末尾に「昭和四十五年十一月二十五日」の自決の日付が記され、当日前に編集者に渡るよう手配されていた。認識と行為をテーマとするこの小説は、作者の死と関連づけて読まれるように三島自身が仕組み、現実にもそう読まれてきた。だが没後半世紀近くが経過して、ようやくその死の呪縛から解かれて、もう少し自由に小説を読むことが可能になってきたようだ。

『豊饒の海』について、松本徹は「一旦、書き上げられたらなら、小説なるものが終わりになる、もはやいかなる小説も不要になって、書こうとしても書けなくなる」「究極の小説」を目指した作品だと述べ（『三島由紀夫を読み解く』、橋本治は「日本の幻想文学の第一位に遇されるもの」だと賞したが（『三島由紀夫』とはなにもものだったか』、こうした高評価は決して誇大ではない。壮大な構想をもつ純文学でありながら、仏教的モチーフや古典文学の要素を導入することによってリアルな近代小説の枠組みを超える仕組みを施し、色彩豊かでありながらもケレンみがなく、結末は静謐に満ちているという、まさに希有な小説なのである。

### 夢と転生の壮大な物語

『豊饒の海』は、「世界解釈の小説」『豊饒の海』について）を指して書かれた「夢と転生の物語」で、四巻からなる。二〇〇五年に映画化もされた第一巻の『春の雪』の時代は大正初年。青年華族

の松枝清頭は、皇族の許婚となった幼なじみの綾倉聡子と恋愛し、禁忌を破る最高のエロスを味わったすえに亡くなる。第二巻『奔馬』は昭和初期、左の脇腹に清頭と同じ三つの黒子をもつ少年・飯沼勲は「純粋」を信条としており、昭和の神風連たらんとテロを企てて自決する。死ぬことによつて天皇の権威を究極の高みに押し上げようとしたのである。第三巻『暁の寺』はタイのお姫様・月光姫、第四巻『天人五衰』は透徹した目をもつ孤児の安永透が主人公である。透を除く各巻の主人公たちはいずれも二十歳で亡くなり、次の巻の主人公へと生まれ変わりを繰り返す。その転生を見守り続けるのが清頭の友人であった本多繁邦で、巻ごとに時代も舞台も色合いも異なる長編小説の縦軸を担っている。

### 時間がジャンプし、円環する小説

生まれ変わりの理論的背景として仏教の「唯識」があり、とくに『暁の寺』では詳細な仏教哲学が展開される。時間的には、大正初年から、作品執筆時よりも後の一九七五（昭和五〇）年までの六十年あまりを物語時間とする近未来小説でもある。三島は時間を追って続くクロニクル（年代記）には飽き飽きしたと言い、「どこかで時間がジャンプし、個別の時間が個別の物語を形づくり、しかも全体が大きな円環をなすもの」を求めて、輪廻転生をモチーフとして採用したと説明した（『豊饒の海』について）。各時代の状況がふんだんに取り込まれるとともに、舞台は、日本から、タイ、インドへも広がっていく。

「生まれ変わり」という一見荒唐無稽なモチーフを軸に展開する小説は、第一巻の末尾に平安末期の王朝物語である『浜松中納言物

語』が典拠だと明記されているが、現在では古典文学研究者を中心に、『源氏物語』の宇治十帖、さらには『竹取物語』へと典拠の検討が進んでいる。生まれ変わりについては、各巻の主人公の真贋が問われ、また転生は本当に起きているものなのか、あるいは副主人公の本多だけが見た幻想なのかをめぐっても解釈が分かれている。他にもこの小説には読み解かれるべき数々のモチーフに満ちている。

### 読み手を空の世界に誘う結末場面

だが、何ととっても『豊饒の海』の鍵は結末部にある。死期を悟った八十歳の本多は、清頭の恋人であり勅許を破ったために奈良の月修寺に出家した綾倉聡子を六十年ぶりに訪ねるのだが、それは本当に不思議な場面である。聡子門跡が発した言葉によって、六十年にわたって輪廻転生を見続けてきた人物・本多繁邦が空に直面させられるばかりではなく、彼の認識にそって四巻にわたる生まれ変わりを営々と見続けてきた私たち読者も、「記憶もなければ何も無い」ところに誘われて、読書行為そのものが醜化させられてしまう。

最終巻末尾の不思議に静謐な庭の場面は、四巻にわたる輪廻転生の物語を読み続けてきた者だけに与えられる特権である。小説にこのような力があつたのかと茫然とさせられる至福の読書体験を、ぜひご自身で味わっていただきたい。

〔付記〕 本稿は、アシエット社から二〇一五年に刊行予定の分冊百科事典シリーズ「文豪の世界」の一冊『三島由紀夫』のために書かれたものである。一四年末に執筆依頼を受けて、一五年二月に入稿した。すぐに初校が出て、原稿料も支払われたが、刊行されないまま年月が経ち、最近になって、シリーズの企画が中断したこと、原稿は転載可能で自由にしてもらってよい旨の連絡が届いた。短文ではあるが、特に「仮面の告白」の方は当時としては新規なことも述べており、いずれは論文化するにせよ、まずは旧稿を活字化してきたく、センター長の宮川朗子先生に本誌への掲載をお願いした次第である。掲載をお許しくださったご厚意に感謝申し上げます。

（ありもと のぶこ、広島大学大学院文学研究科教授）